

林逸抄の「草子地」について

—その用語の多様性の説明—

井 爪 康 之

はじめに

「草子地」の用語には統一ある変遷のあることは既に述べてきた。^{注(1)} 本稿をなすにあたり必要最小限に略記すると次の如くである。

草子地という語を初めに用いたのは帯木別注における宗祇であり、次は一葉抄の藤正存である。しかも、この二人はともに草子地を今日いう地の文一般を指摘するのに用いたのであった。

いわゆる作者が介入してくる地の文の指摘は、耕雲本より花鳥余情、一葉抄に至るまで、作者の詞、記者の詞、記者筆の類の語を用いたり、会話文の主語を示すのに登場人物が記されるのと同じ方法で、「記者」「作者」と書き入れる形で行われてきた。

このほかに、「作者の詞」ほど明確なものではないが、地の文の中で、今日いうものは多小趣きの違う文は、弄花抄、一葉抄では、草子の詞として指摘している（草子の詞について一部述べたところがあるが、現在考察中で、端的な表現は避けたい）。

従って、一葉抄までは、地の文の中に、「作者の詞」「草子地」の三種類があることになっていた。^{注(2)}ところが、細流抄は「作者の詞」「草子の詞」を統一して、「草子地」にしてしまった。^{注(3)}このとき、草子地はいわゆる「地の文」を指摘する力を失うと同時に今日

の難解で、誠に便利な語になったのである。

其後、草子地は、双、双地、地などの略号（語）で示される程、愛用され現在に至っている。

本稿では、林逸抄の成立時には姿を消したはずである草子の詞が混入している原因を追求して、前述の「草子地」の用語の変遷を確認しておきたい。

(一) 林逸抄の「草子地」の注記

林逸抄が「草子地」の注記をつけている箇所を用語別にまとめると次のようになる。肩付（「一葉云ふ」「祇注に」等の形式を含む）等があつて出典の明記してあるものはこの中に入れない。

作者の詞	37
草子の詞	84
草子地	20
双または双地	12
双番	62
その他	20
合計	235

このように、草子詞が84例もある注釈書は一葉抄の99例以外にない。(弄花は9例のみ) 細流抄(1)、休閒抄(5)、孟津抄(1)に散見するものは、いずれも弄花抄の強力な影響のもとに残在したものであった。^(注5)

ところが、林逸抄の84例、湖月抄の師説9例、季吟の8例は、先に調査した、細流抄、休閒抄、孟津抄とある点では一致するが、別の観点から考察する必要があるであろう。即ち、林逸抄、湖月抄の草子詞は共に一葉抄の影響を受けている点—先行注釈書の影響を受けていること—では細流抄等と一致するが、「一葉抄」を意図的に引用したのではないかと想像される点で細流抄らとは異なるのである。

ともかく、林逸抄、湖月抄の草子詞は林宗二や北村季吟が主体的に用いたものは少い。湖月抄については、紙幅の関係で続稿に譲りこの点を中心に、煩を厭わず述べてみたい。

〔二〕林逸抄と先行注釈書の関係

中世の注釈書は、諸注集成型のものは勿論単独形式のものも、他の注釈書の影響を強く受けており、その引用形式や注記相互間の異同を調べることは成立事情や作成の意図、あるいは注釈内容そのものを究明する有力な手がかりになる。特に林逸抄のように複雑な様相を呈しているものは注釈書相互の関係を解きほぐしていくことが大切と思われる。

林逸抄の諸注引用形式については稲賀先生の御論稿があり、改めて付け加え得ることはない。本稿を進めるうえで必要なことを整理しておきたい。^(注6)

a. 出典を明記するもの

引用注釈書名を略号の形で示したり、「……云」の形式で注記の中に書き込んであったりするものである。

① すぎにしかたのむくる(絵合一九七・八 漢数字は『対源氏物語新釈』の頁数・アラビア数字は行数を示す。以下同じ。)

臘月夜の御事を云り花及すまのうきめありし事也弄草子詞弄

② うちくの御ありさま(紅葉賀二七七・13) 休云わか草いとき

なきと葵上かたにはえしうぬ也一葉云源氏の御心を云也前後
みな草子地なり

③ かのきみかく(竹河四〇〇・1) 中将の事を玉かつらの、
給也弄此義如何双弄也私

④ の例は「私」と丁寧なことわってあるがこの方法が全編に貫かれていたわけではない。これは、林逸抄に限ったことでなく、岷江入楚はじめ、首書源氏、湖月抄、万水(露も同様である)。

b. 出典を示さないもの

他の注釈書をそっくり引用しながら、出典が示してないものである。

① いひつたへたるとなん(桐壺三一・11) 紫式部か詞也我書いた
さぬとの心也すへてこの物語に作者の詞人々の心詞双弄詞草弄
子の地ありよくく分別すへし

② 源氏の御事とも(明石八三・1) 双弄の詞也上は双弄の地也
桐壺巻の例は、作者の詞、草子詞、草子地と三つに分類した一葉抄の貴重な例で他にまねができないものである。明石巻のも草子の詞と草子地を使いわけたもので、一葉抄以外の注ではない。この二

例は、一葉抄をそっくり引用しながら、出典を明かさなかつたものである。

c. 出典の一部改変

引用注釈書の一部を改変し、出典も示していないものである。

まねひやらん方なし(柳三八八・10) 双昏也何やかやなれば

と也入林逸抄^①

双也何やかやなればと也双入休聞抄^{注(6)}

林逸抄と休聞抄の注記は双昏入林^①と双入休^②を除いて全く一致する。しかも、林逸抄は休聞抄を他のところでは引用したことを明示しているので、まず、休聞抄の注であらう。

他の注釈につけ加えたり、削ったりしている例を示してみよう。

①いかて女のつくろひて(御幸一二五・13) 玉かつらの心にそ

れほとなくみ給也けさうしたるかほなとにくらへて思ふわり

なしと也双昏詞也入林逸抄^①

いかて女のつくろひたてたる けさうしたるかほなとにくらへ

て思ふわりなしと也双昏詞入一葉抄^②

林逸抄の傍点部(私に付す)以外、一葉抄と全く同じであるから、一葉抄に一部付け加えて林逸抄の注としたものであらう。

②みたりかはしきを心おさめざるほとに(桐壺一六・5) 両義

あり一にはみたりかはしきは文の書きさま也うへよりの御めに御らんしとかめたる事也されは折節からなれば御らんしゆるすへしと也一には哥の事也小萩かもとそなと餘りなる事と

也何にも草子のことは也いとかうさしも御門の御心也^休長い注の最後に「休」とことわってあるところから、一見すると

休聞抄の引用のように思われる。ところが、「みたりかはしきを」以下「草子のことは也」までは「一葉抄と全く同じ」^{注(6)}で、「いとかうさしも」以下は休聞抄には

いとかうさしも 御門の御心也^細

とあり、細流抄を引用している。従って、この注は一葉抄と休聞抄(内容は細流抄の注)の借用から成り立ち、しかも休聞抄のは別項で、これが交りあったがために、長い注になったのである。

以上の二例は、注釈書を引用したり、参考にしながら、加除して注釈を作りあげたものである。

d. 用語の改変

細流抄が草子の詞と作者の詞を草子地にまとめてしまったように、注釈そのものは先行注釈書にあるにもかかわらず、用語を変えているものである。

①そのついでにいと(柳三九八・9) 紫式部か詞也入林逸抄^①

そのついで 詞者の筆也入弄花抄・一葉抄^②

弄花抄、一葉抄で「記者の筆也」とあるのを作者の詞に改めたものである。

②おもいやりつへき 双紙の詞入林逸抄^③

いはすとも 作者の詞入一葉抄^④

この本文は、

そのほどの有様はいはすとも思ひやりつべき事ぞかし。(楳柱二二七・9)

であり、省筆の断り書きである。省筆など、作者が露骨に介入してく

ていない。林宗二は弄花抄、一葉抄を手許に置きながら、「作者の詞」を「双紙の詞」に変えたのであろうか。

e. 伝本間における異同

注釈書の引用方法ではないが、伝本の異同が本稿に關係するのでふれておきたい。

私が調査した内閣文庫本のままでは誤解の恐れがあり陽明文庫本に当たってみた。

①御をくり物に笛を（横笛一八一・3）

笛の外をくり物ありと聞えたり双帯詞也（内閣文庫本）

御をくり物に笛を 笛の外にをくり物ありと聞えたり（双帯詞）

也（陽明文庫本）

内閣文庫本のままでは、花鳥余情に「双帯詞」という注記があるように見えるが、陽明文庫本では花鳥余情の注は、「双帯詞」の前までで、「双帯詞」は林宗二がつけたことになり、語の使い方に問題は残るにしても、内閣文庫本に「双帯詞」があるということに比べれば落着いた形になる。

②さうしみは（総角一五七・9） 中君也草子なり（内閣文庫本）

さうしみは 中君也草子の地也対面の時ふかく契給事なれば自然のさはりもよくくの事也（陽明文庫本）

内閣文庫本で「草子」とのみ注記するところを陽明文庫本は傍点を付した部分の長い注を付けている。用字の面から見て、内閣文庫本は「双」「双帯」を用い「草子」という用語は使用しないので、陽明文庫本をとり、内閣文庫本は注記が脱落したものと考えたい。

右の二例は林逸抄そのものに問題があり、さらに詳しく調査する必要がある。しかし、これも林逸抄に限ったことではなく、私の調査した注釈書のすべてに言えることで、特に気づいたところについては、一端を述べた。注今後、注釈書を調べあげながら、より正確なものにしていくべきであろう。

林逸抄の引用方法は、以上のように出典を明記することもあれば、今日の剽窃まがいのももあり、そのことが誤解を招くことも多かるう。たまく「草子地」の用語に限って調査しても前述の如くである。

(三) 林宗二の「草子地」

林逸抄の作成方法（諸注の引用方法）が以上の如きものであれば、さきに述べた用語の実態についても再検討する必要がある。そこで、私が調査した「草子地」に関する注記、二五〇例を次の三通りに分類し、まとめたのが別表である。表中の記号は左の意味である。

◎ 出典の明示してあるもの

○ 出典は隠されているが、先行注釈書を引用したり参考にしていると思われるもの。

△ 用語や注記には先行注釈書との間に異同があり、直接の影響は確認できないが、参照した可能性のあるもの。

△付記▽ここで先行注釈書として扱ったのは、林宗二が引用したとされている弄花抄、一葉抄、休聞抄に花鳥余情である。このほか、細流抄なども間接的には影響が考えられるが、右の四書に限った。

表 I

用語 の關係	注釈書と					
	作者の詞	草子の詞	草子地	双(双地)	双 帯	その他
◎	1	9	3		2	15
○	25	60	15	10	7	117
△	5	7	2	1	42	62
▲	7	17	3	1	20	56
計	38	93	23	12	62	250

表 I の最下段の 56 例が林宗二独自の注である。作者の詞の類 7、草子の詞 17、草子地 3 双(双地) 1、双帯 20、その他 8。以上のよ
うな内訳になる。作者の詞の類やその他に属するものは、草子地に
統一されていったとはいえず、他書にも比較的残存しやすく、双帯は
類のないもので、彼の発案による独特の語である。問題は細流抄以
後、姿を消したと見られる草子の詞であろう。

四 林逸抄の草子の詞

草子の詞について、林宗二は何も述べていないし他の用語、例え
ば、双帯とどのように関係づけて使っているのかも明らかでない。
彼が他の語を用いずに、草子の詞を用いた意図なり経緯を知るわず

かな手掛りになるかと思ふのは次の二つの注である。

○猶いかに物おもはし(松風三二九・八) 明石上の心也双帯ノ

詞と見ゆ

○しに入るたましひの(御法三二二・五) 夕霧の心也この御か

らにとまらんとはとまれとをもふ也かなしむ人の絶へする

か紫上のからへやいらんと也双紙の詞也^冊

前者は「見ゆ」ということばを使うからには、彼なりの料簡があ
ったことを思わせる。後者は「清」なる注釈書の引用だとして
「清」はこのほかにもかなり引用されており、今は見ることで
ない注釈書か説であったのだろう。その中に草子の詞が用いら
れたというのである。何分、一例のことであり、肩付の位置次第
はさきほどの花鳥余情と同様になるのだが。ともかく、林宗二の料
簡があつて用いたものと、弄花抄、一葉抄以外に草子の詞を用いた
注釈書があつたと仮定して進めて行きたい。

ところで、林宗二の「草子の詞」17例は、次のように、物語の第
一部から三部まで、全般にわたつて出てくる。

- 葵(三八一・一)・須磨(一一二・九)・明石(一〇三・11)
- ・蓬生(一四八・13)・(二五九・13)・松風(二二九・3)
- ・常夏(九五・9)・楨柱(二一八・4)・横笛(一一八・1)
- 3)・鈴虫(一九六・13)・御法(三二二・1)・匂宮(三五
- 二・8)・(三五七・11)・(三五八・11)・竹河(三九一・
- 6)・総角(一五六・5)・浮舟(一二二・9)

全編に散在するが、御法巻より竹河巻にかけては集中している。
散在するものは直前に弄花抄や一葉抄の注記があるのでその影響で
はないかと思われる。御法巻より竹河巻にかけては何か別の注釈書

があつたのかもしれない。

散在する例として、明石巻を、集中している例として、御法巻より竹河巻をとり出して実態を示そう。

a. 散在型の例 (明石巻)

(林逸抄)

①すへてまねふへくも (七八・

1) 紫式部か筆也

②数しらぬ (七九・6) 紫式

部か詞也書とめんもうるさし
と也

③おこに (七九・7) 入道の
云事うそかましきと也双也

④源氏の御事とも (八三・1)
双昏の詞也上は双昏の地也

⑤けに物おもひしらん (八七・
13) あたら夜のなと云へる
末をうけてけにとかけり双昏

の詞也

(他の注釈書)

①すへてまねふへくも (七八・

1) 紫式部か筆也 (休閒)

②数しらぬ事ともきこえつくし
たれと (七九・6) 紫式部

か詞也 (弄花・一葉)

③かすしらぬことも (七八・

6) 紫式部か詞也書きと、
めんもうるさしと也 (休閒)

④おこに (七九・7) 入道の
云事にておこかましきと也双
也 注(節)

⑤源氏の御事ともなりけんかし
(八三・1) 双昏の詞也上
は草子の地也 (一葉)

⑥けに物思ひしらん人にこそ見
せまほしけれ (八七・13)
あたら夜のなと云る末をうけ
てけにとかけり草子の詞也

⑥まことや我なから (九〇・

1) 誠やは双昏の詞也我な
からといふより御文の詞也京
にてそなたかなたとありて紫
上に恨れ申たるを思出て口惜
後梅に思召よし御ふみに書給
也

⑦いかなるへき (九一・13)

双昏也たかひの心をしらぬよ
し也旅の御思切なるも猶行末
かたしとくつろけて書り

⑧六月はかりより (九三・7)

明石上の懐妊の事也
女はさらにもいはす
いとことほりなるや (九三・7)

⑨されと何かはと (九七・13)

記者の詞也哥のしるしもらす
と也 草子
の詞也

⑩まことや (一〇三・11) 双

(一葉)

⑤けに思ひしらん人に (八七

13) 双也 (休閒) 注(節)

⑥まことや我なから (九〇・

1) まことやとは双紙詞也
我なからといふより御文の詞
也 注(節) (一葉)

⑦いかなるへき御さまともにか
あらん (九一・13) 双也
(休閒) 注(節)

⑧いとことほりなるや (九三・

7) 草子の詞也 (一葉) 注(節)

⑨されと何かはとて (九七・

13) 御共の人人の涙をと、
めていさみたる心也又くちく
ちとは哥の事也されと何かは
とて記者の詞也しるしもらす
と也 注(節) (一葉)

⑩まことやかのあかしには (一

帯の詞也

- ①御心はへは(漂標一二三・
4) ねたみ玉ふ御心にはあ
らず双帯也

○三・11) 例の式部か筆法
也さやうにあるかとの心也
(万水一露)

- ②御心はへにはあらず(漂標一
二三・4) 双(休閒)

林逸抄・明石巻の「草子地」に類する注記を先行注釈書と対照しながら抜き出してみると、右のように、⑩を除いてすべてに隠れた出典がある。尚、明石巻の最後の指摘箇所を当面問題にするので、漂標巻の最初のものも参考として書き出した。

①は休閒抄以外に注記がないうえ、本文の引用、注釈とも全く一致するから、休閒抄を引き例によって肩付を落すか、つけなかったものであろう。②も①と全く同じケース。但し休閒抄は弄花抄の強い影響をうけており弄花抄の「紫式部か詞」の機能を解説して自らの注にしているにすぎない。③は休閒抄と林逸抄だけが注釈をつけている箇所であるが、「うそがましき」と「そがましき」の違いにすぎない。④はすでに述べた。一葉抄からの直接の引用である。

⑤は管見に入った注釈書では、休閒、細流、紹巴抄がこの個所に注をつけるが、一葉抄に殆んど一致する。一葉抄よりの引用であろう。⑥も前半は一葉に一致し後半は林宗二が独自の注をつけたものである。因みに、この個所に湖月抄が「師説三」として引く注は一葉抄に全く一致する。⑦は一葉、細流、休閒、紹巴抄が注記を付けている箇所である。休閒、紹巴は「双」だけ記し内容にはふれな

い。一葉、細流、林逸抄は互いに共通点があるものの、語句、内容、観点、いずれも一葉抄がより近くはぼ同じ注といえよう。内容を一部かえ、用語をかえて、独自性を主張したものである。先例(総角一五七・9)のように、「双帯詞」の「詞」が脱落したもので、一葉抄からの引用かと疑ってみたが、用語をつける順序が逆で、機械的な作業の結果とは思えない。

⑧は二行書きで挿入され、割注の如く見えるが、この部分は独立した注記である。一葉抄に全く同じ。⑨は⑧とは逆に一葉抄の注の一部を抄出して自らの注にしたものである。

⑩はここで問題にする唯一の注である。これまでは出典らしきものがあって、林宗二独自のものは無かった。一方、彼自身、独自性を出すことに腐心した形跡はある。この⑩は万水一露が注するのみで、林宗二にとっては独自のものであり、自ら恃むところがあるのかもしれない。本文を示してみよう。

院の御ために御ハ講行はるべき事まづ急がせ給ふ。(略)入道の宮にも、御心すこしづめて、御たいめんの程にも、あはれるなる事どもあらむかし。まことや、かの明石には帰る波につけて、御文つかはす。引き隠してこまやかに書き給ふり。(明石一〇三・6)

桐壺院の御ハ講の場、源氏が久しぶりに、春宮、藤壺に対面するところが言外に「草子地」の立場から推測され、また、明石上に源氏が心を配っていることがせわしく語り出されるところで、これも「草子地」的表现である。

同じ明石巻の⑥の「双紙の詞」と注記した例に照しても、異論はなく、この林宗二の「双帯詞」の指摘は、後の万水一露の注記と

もに特筆すべき読みであろう。

ここに、草子詞という語を用いていることについては二つの場合を想像しうる。一つは、記者の詞、草子の詞と一葉抄に引用された用語が続いたので、彼自身の用語、双帯を不注意から用いそこねた、もう一つは、弄花抄、一葉抄以外に同系統の注釈書があり、それを引用ないし、参照したことである。この場合前者の可能性が強いと思うが、尚決め手を欠く。他の散在する例についても同様である。

次に明石巻とは逆に、出典や想像しうる根拠もなく、草子の詞が集中的に用いられている匂宮巻を中心に考察してみたい。

b. 集中型の例(匂宮巻を中心に)

(林逸抄)

夕霧巻

(他の注釈書)

①いひやるかたに(二九六・)

①いひやる方なくとそ(二九六

7) 紫式部か語也卷々如

・7) 紫式部か語也卷々如此

此^味

(弄花)

御法巻

②御色はいとしろく(三二二・1)

紫上也ひかるやうにてといふ

よりさらなるまでさうしの詞也

(双帯 陽明文庫本。以下かつて書きは同じ)

③しに入るたましひの(三二二・5) 夕霧の心也この御からにと

まらなんととはとまれとをもふ也かなしむ人の絶入するか紫上の
からへやいらんと也双帯の詞^味

(夕霧の死入程に思

ふ玉しるの紫上のなきからにと、まれと思ひ給ふはあまりなる

わりなき心と云也)

④世の中にさいはい(三一七・6) 御心はへなりかくといふまで

みな紫上事をほむる詞也さうし也

(双帯)

幻巻

⑤見給ひすくさすや(三二五・

14) 双帯

⑥女も物あはれに(三三四・

7) 双帯也

⑦まことや(三四五・4) 双

帯詞也

⑧その日そ出給(三四五・8)

道師の御対面のために内より
外さまへ出給し也内ぐにのみ
こもりぬ給しかはその日そと
かけり^味双帯の詞也

匂宮巻

④院をこひ(三五二・8) 六条院の事也さうしの詞也

⑩御心さまも物ふかく(三五六・11) 源氏の御事を云双帯也御心

もちなたらかなるなり

⑪われ人にまさらん(三五七・11) たきしめなとする人の事也こ

ゝもとみなさうしの詞也

(双帯の詞)

⑫我もかう(三五八・11) むさし野の霜かれに見し我もかう秋し

もをとるにほひなりけり花こゝもとと双昏之詞面白し

⑮ いひつゝけて (三五九・六)

匂宮かほとと世上の物の云と
紫式部かいひのかれたる詞也

⑯ いひつゝけて (三五九・六)

匂宮かほとと世上の物の云と
紫式部かいひのかれたる詞也

(休閒)

⑰ わかかく人にめて (三六一・

9) 薫生得の身の香をのつ

から人人のめて奉るによりて
いひかけ給人のなひかぬはな
き程にをのつからかよひ給所
おほしと也草子地也

⑱ わかかく人にめてられんと

(三六一・9) かほるの事也

心よりめてられんとにはあら
す自然の風情也草子の地也
(一葉)

①は弄花抄の引用であることを確認して、御法、幻、匂宮の三巻を検討していきたい。②、③は紫上が静かに死にゆく場面、草子

地的表現が続いている。林逸抄に重なる先行注釈書の注記はない。

しかし、すぐ前には、弄花抄、休閒抄の注があり、林逸抄以後のものでは紹巴抄、孟津抄も注を付けている。③は「清」の肩付がある。

該当する本文は草子地的表現の連続するところで短く区切れれば三つないし四つの指摘も可能であろう。又、ひとつの注記でも済ます

ことができる。ところで、②の方は、明石巻の最後の例と同じように、弄花抄の影響を受けて、「双詞の詞」の語を用い、③は「清」

なる注釈書より引用したものと仮定しておきたい。(この仮定は、弄花抄、一葉抄以外に「草子詞」を用いた注釈書があり、秘かに行

われていたことを想定するのである。)

④は先行注釈書には無く、管見に入った限りでは、万水一露が注

記するだけである。林宗二独自のものであろう。

幻巻に移る。

⑤は引用本文、注記ともに休閒抄に一致する。⑥は本文の引用に一部異同はあるが、休閒抄に注記があり、⑦も本文の引用に違いはあるものの一葉抄に同じ注記がある。⑧は一部弄花抄からの引用であるとしているが、全体では一葉抄に全く同じである。

以上のように幻巻は全部隠れた出典を指摘し得る。

ところが、匂宮巻は⑨⑩と全く出典を想定し難い注が続いている。そのうえ、いづれも、手許の資料では、林逸抄だけが「草子地」に関する注記をつけているのである。仮名書き例も珍しく、確認のため陽明文庫本を調査したところ、⑨は仮名書き、⑩は漢字が使われており、⑩が偶然によるものでないことが明らかになった。

⑨から検討してみよう。該当箇所を引用すると、

天の下の人、院を恋ひ聞えぬはなく、とにかくにつけても、世はただ火を消ちたるやうに、何事もはえなき歎きをせぬ折なりけり。(三五二・8)

源氏の遺徳を讃え、なきあとのさびしさを表現している。このことの具体的記述はこれより前にかなり詳しくなされている。

⑩この二所(兼・(三言))なむ、とりとに清らなる御名取り給ひて、げにいとなべてならぬ御有様なんめれど、いとまばゆき際にはおはせざるべし。ただ世の常の人さまに、めでたくあてになまめかしくおはするをもととして、さる御中らひに、人の思ひ聞えたるもてなし有様も古への御響きはひよりも、やや立ちまさり給へる覚えがらなむ。(匂宮三四九・4)

⑬二の宮も同じおとどの寢殿を時々御休み所にし給ひて、(匂宮

◎女一宮、六條院の南の町の東の対を、その世のしつらひを改めずおはしまして朝夕に恋ひ偲び聞え給ふ。(匂宮三五〇・2)

④さま／＼につどひ給へりし御方々、泣く泣く遂におはすべきすみかどもに、おのおの移ろひ給ひし(匂宮三五一・2)

◎右のおとど(略)丑寅の町にかの一條の宮を渡し奉らせ給ひてなむ、三条殿と夜ごとに十五日づつ、うるはしう通ひ住み給ひける。(匂宮三五一・7)

④明石の御方は、あまたの宮たちの御後見をしつつ、あつかひ聞え給へり。(匂宮三五二・3)

④は、源氏を讃えるとともに、薫、匂宮二人のあとつぎの物足りなさを嘆き、⑤では、二の宮(匂宮の兄)の六条院を慕っていることを述べ、⑥⑦は女一宮や明石上、花散里、女三宮が紫上、源氏を恋ひ慕いつつ、散り散りになっていくさびしさを描いている。⑧は源氏の死後、夕霧の六条院当主としての振舞いを書きたて、⑨は明石上の交らぬ、つつましかかな行為で、源氏の遺徳を讃え、最後に⑩で、六条院の御殿を昔のまま残すことよってまとめている。

以上の源氏の遺徳を讃えるとともに、死後の寂しさをかいつまんで、繰り返したのが「天の下の、院を恋ひ聞えぬはなく、とかくにつけて世は火を消ちたるやうに、はえなき歎きをせぬ所はなかりけり」であろう。

作中世界の当然の帰結をまとめて繰り返すのが「双昏の詞」の特徴のひとつであった。林逸抄の「双昏の詞」も弄花抄、一葉抄の範疇にあると言えようか。

④は私の調査したものではありません。独自のものでは他に注記がない。独自のもの

④も独自のものであるが、⑩と異り、「双昏」ではなく「さうしの詞」を使っている。両注の間には隔たりがあり、隣接するものではないので、意図的に用語を使わないかぎり混乱はあり得る。

内容の面から検討するために本文を引用すると。(連続する文であるが便宜上、④⑤にわけると)

④香のかうばしさぞ、この世の匂ひならず怪しきまで、打振舞ひ給へるあたり遠く隔たるほどの追風も、誠に百歩のほかまかをりぬべき心地しける。(匂宮三五七・8)

⑤誰も、さばかりになりぬる御有様のいとやつればみ、ただありなるやはあるべき、さま／＼にわれ人にまさらむとつくるひ用意すべかめるを、斯くかたはなるまで、うち忍び立ち寄りむも、物の隅もしるきはめきの隠れあるまじきに、うるさがりて、をさ／＼取りつけ給はねど、あまたの御唐櫃にうづもれたる香の香どもも、この君のはいふよしもなき匂ひを加へ、お前の花の木もはかなく袖かけ給ふ梅の香は、春雨の響にも濡れ身にしむる人多く、秋の野に主なき藤袴も、もとのかをりは隠れて、なつかしき追風殊に折しながらなむまさりける。(匂宮三五七・10)

匂宮と薫が比較して連々と述べられ、薫の体臭に及んでいるところである。④では、体臭の強さが端的に述べられ、⑤はより詳しくはしてあるものの、その観点は④の域を出ない。

④、⑤の文に傍線を付して対応を示した部分を検討してみたい。④の「怪しきまで」を⑤で「かたはなるまで」と香の強を言葉

変えて表現し、㊸の「打振舞ひ給へる」の内容を㊹で「うち忍び立ち寄らむ」「袖かけ給ふ」と具体化している。「追風」を百歩の外までと空間的拡がりに利用した㊸の文を㊹では藤袴に重ねて、質的表現に変えると同時に、より文学的に脚色した。しかも、「追風」という語を繰り返して、㊸㊹の文のつながりを意識的に強調したものであろう。

このように、㊸の文は作中世界の展開力は全く無く、㊸の世界をより具体的、絵画的に繰りかえしたにすぎない。そのうえ、「香」↓「袖」↓「春の梅」↓「秋の藤袴」と平凡な題詠の発想の中に、当時人口に膾炙した三つの歌を折り込んである。作中世界の繰り返し、平凡な題詠の発想、引き歌、いずれも、多数の人の共通理解のうえに成立つものである。それ故に物語（ストーリー）の創造や展開に直接荷担するものではなく、今日の読者から見れば unnecessary のが書きとどめられていることは、多くの人が文学の場に関わった痕跡であり、この痕跡こそ、弄花抄、一葉抄が、「作者の詞」と區別して、「双帯の詞」としたものではなからうか^註。

㊸の該当本文を引用してみよう。

斯く恐しきまで人の咎むる香にしみ給へるを、兵部卿の宮なむ、他事よりも挑ましくおぼして、それはわざとよろづのすぐれたるうつしをしめ給ひ、朝夕のことわざに合せいとなみ、お前の前裁にも、春は梅の花園を眺め給ひ、秋は世の人のめづる女郎花、小牡鹿の妻にすすめる萩の露にも、をさ／＼御心移し給はず、老いを忘るる菊に衰へゆく藤袴、物げなき地榆などは、いとすさまじき霜枯の頃ほひまでおぼし捨てずなど、わざとめきて、香にめづる思ひをなむ、立てて好ましうおほしける。

（匂宮三五八・5※は私に付す。）

この部分は、薫や匂宮の性格、行動を積極的に創り出しており、単なる「繰りかえし」や感想の類ではない。いわゆる地の文の機能^註を十分に果していると思われる。

注記の対象となった「地榆」前後は、春の花、秋の花の香り豊かなものを撰り出して具象的表現が行われているので、「双帯の詞面白し」はそのことばの美しさを指摘したものであろう。用語としての「双帯の詞」とは考えにくい。「双帯の詞」が用語として確立するのは一葉抄に於いてであり、弄花抄では、二例、一般的な物語のことばの意味で使われていた。ここはその例と見たい。

㊸は休閒抄よりの引用であらう。

㊸の箇所は、一葉抄が「草子地」と注記するほかは湖月抄が傍注に「草子地にいふ也」とする以外、手許の資料では、「草子地」に関する注記はない。

試みに、花鳥余情、弄花抄、休閒抄を調べてみると注の内容は弄花抄一葉抄よりも花鳥余情、休閒抄の方がより林逸抄に近いようである。

○われから人にめてられんとなり給へるありさまなれば（三六一・9） かほる中将の生得の身香をのつからみる人ことにせめてさるはなきをいふなり人花鳥余情^註

○われもかく人に（三六一・9） 薫は生得の身香をのつから人のめて奉る也人休閒抄^註

○わかかく人にめて（三六一・9） 薫生得の身の香をのつから人のめて奉るによりていひかけ給ふ人のなひかぬはなき程にをのつからかよひ給ふ所おほしと草子地なり人林逸抄^註

●わかかく人にめてられんと(三六一・九) かほるの事也心より

めてらんとにはあらず自然の風流なり草子の地也ハ一葉抄V

●わかかく人に(三六一・九) かほるの事也但心よりにハあらず自然の風流也ハ弄花抄V

○印をつけた花鳥余情、休閒抄、林逸抄の内容は非常によく似ている。相違点は花鳥、休閒が「人のめて奉る」とするところを林逸抄が、「いひかけ給ふ人のなひかぬはなき」と補足したぐらいである。「生得の香」「をのつからめて奉る」ということば使いの共通性からみても、花鳥余情から休閒抄に、休閒抄より林逸抄へと継承過程をたどることができる。それに、一葉抄を参考にして、「草子地」を付け加え林逸抄の注はできあがったのであろう。

このように推測しながら、一葉抄を数多く引用し、自らの注のごとく用いてきたにもかかわらず、草子地という語だけをここで使うことに疑念が無いわけではない。一葉抄と弄花抄の注はほぼ一致しており、弄花抄も無視したことになる。

ともあれ、この「草子地」は心内語につづく地の文を指摘するために用いられたもので一葉抄以外のものではない。因みに一葉抄の草子地と他の注釈書のものとはつき合せてみると、このほかには、細流抄に一例重なるだけである。この一例も、観点は全くちがうが偶然一致したにすぎない。従って、ここに草子地の注をつける林逸抄、湖月抄とともに一葉抄を参考にしたものと思われる。

句宮の草子詞と草子地についてまとめておきたい。

⑨、⑩は出典が見あたらない。形式的にも他の注釈書との比較においても、林宗二独二の注と認めざるを得ない。しかし、⑨、⑩は当時殆んど用いられなかった「双昏詞」を使っていること、⑩

の「草子地」は一葉抄のものであること、⑩のように、一連の注の途中に出典があること、⑩は先行注釈書の合成ではないかと思われること。なかでも、⑩は林宗二独特の用語「双昏」が使われており、若し、⑨、⑩も彼自身の注であれば、「双昏」を用いたはずである。以上の状況から、⑨、⑩に「さうしの詞」を用いたのは出典があったのではないかと思う。

その隠れた出典は、⑩の「双昏の詞」の用い方から、弄花抄の流れを汲むもので、一葉抄に整理される前のものであろう。さらに言えば、この類の、尚柏やそのグループの注釈体系の中に、御法巻に「双昏の詞」の注記をつけたものとして引用されていた「清」なる注釈書も位置づけられるかもしれない。

おわりに

宗祇や尚柏など連歌師の注釈書は弄花抄以外ほとんど顧みられなかった。一葉抄は林逸抄が引くだけである。しかし、続稿で述べるように、湖月抄の「師説」が指摘する「草子の詞」はほとんど一葉抄に一致するし、季吟の注釈と思われる傍注の「草子の詞」も一葉抄に指摘のあるものばかりである。連歌師による注釈書は三条西家のもののように表街道は歩まなかったが裏に根づくように流れて行ったようである。

注1 拙稿「草子地の用語について」(『国語国文』昭和四十九年十一月)

注2 拙稿「連歌師の源氏氏積の一側面——草子地を中心に——」(『連歌と中世文芸』所収 昭和五十二年二月)

注3 拙稿「『草子地』の原初形態の解明——一葉抄を手がかり

にして」(「国語国文」昭和四十三年八月)

注4 拙稿「草子地の交遷——一葉抄から細流抄へ——」(「中世文芸」46 昭和四十五年三月)

注5 注1の拙稿で少し述べた。

注6 注1の拙稿に私の不注意より首書源氏の師説と湖月抄の師説をとり違えて表示してしまつた。ここにお詫びすると共に訂正させていただきます。

注7 「林逸抄所引の源氏物語尋流抄をめぐって」(「古代中世国文学」1 昭和四十九年二月)

注8 内閣文庫本による。

注9 一葉抄の該当箇所を示すと、「みたりかはしきを心おさめさるほと、——両義あり一にはみたりかはしきは文のさま也うへよりの御めに御らんしとかめたる事也されとおりふしからは御覧しゆるすへしと也一には哥のこと也小萩か本そなとあまりなるにやと也何にも草子のことは也(広大本による以下同じ。)

注10 注1に同じ。

注11 注1に同じ。

注12 この他の注釈書では、細流抄、「草子地」・紹巴抄、「双」・万水一露は「とうちみたれ給へる御さまへ入道の心はへもあらはれぬへかめり」と本文を長く引用したあと、「弄、紫式部か詞細草子地に云也閑例の式部か筆法也へかめりまで草子のひはんなるへし」と諸注を列挙し、永閑の注を付している。

注13 この他には細流抄が「物思ひしらん——草子地也明石上よ

りもいまいちと物の心しりたる人にと也」と注記し、湖月抄がこれを引用している。紹巴抄は「双地」とのみ記す。

注14 湖月抄には、「(細)文の詞也(師一説)三まことやとは双子の詞也、我ながらというより御文の詞也」とある。

注15 細流抄に「いかなるへき——此行末いかなるへきと草子地也」と記し、紹巴抄は「双地」とのみ注する。

注16 岷江入楚には、「いとことほりなりや——草子地」とある。

注17 この他、休閒抄、「されと何かはとて——双に書て用なきとて書きもらず也」紹巴抄、「されと何かは——うれしきもと有より双也」湖月抄、「されど何かはとてなん——さまざま何かは書べきとてもらしたる記者の詞也」、以上三つの注釈書が注をつけている。

注18 一葉抄に「言旨をむかへつゝかたらひ給さふらふ人々(朝顔二七六・3)——かたらひ給ふときりてさふらふ人々とは齊院にさふらふ人々也さしもあらぬきはの事とは源氏は何共おほしかけぬ事也こゝもとはみなさうしの地なり」の例がある。

注19 注2に同じ。

注20 注2に同じ。

注21 注2に同じ。

注22 注1に同じ。

注23 湖月抄の師説、季吟の説と一葉抄の関係については別に考察する予定である。

(昭和五十三年四月五日改稿)

——京都府立園部高等学校教諭——